



### 三 再び、真夜中の公園

---

夜になった。電灯を消した部屋の中で、健太はふとんの中に入っていた。眼は瞑っていたものの意識はあった。寝たふりをしていたのだ。やがて時計の長針と短針が数字の十二時で重なった。

「まだ、起きているのかい」むにゃむにゃが突然声を掛けてきた。健太が眠っていないことを再びやってきた。

「ああ、眠れないんだ」健太は目を大きく見開いた。

目の前のむにゃむにゃは黙ったままだった。昨日よりは少し大きくなっていて、しばらくして、「ふう」とため息をつく「わかったよ。それじゃあ、君は夢をみられないし、僕は君の夢を持って行けない。じゃあ。明日、また、来るよ」と、窓の隙間から外へ出て行こうとした。

「ちょっと、待って」健太はふとんを跳ね飛ばした。

「なんだい」むにゃむにゃの体は半分窓の外に出ていた。

「君は昨日、僕の夢を持って行かなかったかい」

健太の問い掛けにむにゃむにゃはじっとしたままだった。

「覚えてはいないけど、確か夢を見たような気がするんだよ」

むにゃむにゃがようやく口を開けた。

「君は、昨日、僕が来たときに起きていたじゃないか。夢なんか持って行けないよ」

「そうか。じゃあ。さよなら。僕は寝るよ」

健太は頭からふとんを被った。

「夢を見たら、また、来てよ」

健太がふとんの隙間からむにゃむにゃを見た。むにゃむにゃの後姿は何だか元気がなかった。むにゃむにゃの体が窓から完全に消え去るのを確認すると、健太はさっと起き上がり、むにゃ

むにやの背中を追いかけた。

白い綿菓子たちがあちこちの家から出たり入ったりしている。むにやむにやの仲間たちだ。それが、中央公園の方向に集まって行く。健太は公園の松の木に隠れた。公園の真ん中には、夢の塔が前に見た時よりも更に大きく、高くなって聳えていた。

塔には、集まったむにやむにやたちよりもひと周りも大きいむにやむにやが叫んでいた。以前に見た奴だ。でも、前よりも塔と同じように体が大きくなっている。

「夢を持ってきたか。大きな夢や素晴らしい夢を持ってきたか。持ってきていない奴は、もう一度、夢を奪ってこい」

塔の上から、上から目線で怒鳴っていた。

「だめだよ。こんなところにいちゃあ」

突然、声を掛けられた。振り向くと、健太の家に来たむにやむにやがいた。健太は、自分の夢が思い出せないことや友達の夢がなくなったことの疑問をむにやむにやに問い詰めた。むにやむにやはしばらくの間、黙ったままだった。そして、唇を噛みしめるようにゆっくりと口を開き始めた。

「そうなんだ。僕たちむにやむにやは、最初は、子どもたちの夢を実現するために、この塔を建て始めたのだけれど、今は、塔を大きくするためだけに、夢を集めているんだ。つまり君たちから夢を奪っているんだ」

「そんなことしたら、僕たちに夢がどんどんなくなってしまわないか」健太の声が思わず大きくなる。

「しっ。静かに。見つかってしまうよ」むにやむにやが口に指を当てる。

「だって。それはひどいよ」健太の怒りは収まらない。

「それに、最後はどうなるんだい」

「君たちが夢を見ている間は、その夢を奪うけれど、君たちに夢がなくなったらそれでお終いさ。僕たちむにやむにやに夢を吸い尽くされて、カスカスの大人になるよ」

「そんなことは絶対に許されないよ」

健太は歯を強く噛みしめた。頬が揺れる。だけど、どうしたらいいのかわからない。夢の塔をじっと見つめるだけだ。

「僕も悪いことだと思うけれど、あのリーダーの言うことを聞くしかないんだ。そうしないと・・・」

「お前はそこで何をしているんだ」健太と話をしていたむにゃむにゃがリーダーに見つかった。

「しまった。君はここに隠れているんだよ」

むにゃむにゃは健太にそう言うとリーダーの前に出た。

「お前は夢を奪ってきたのか」

「いいえ。まだです」

「じゃあ。なぜ、そこにいるんだ。さっさと、子どもたちの夢を奪ってこい」

「嫌です。僕はもう、子どもたちから夢は奪いたくありません」むにゃむにゃは体が震えながらもはっきりと断言した。

「何だと。わしの言うことが聞けないのか。よし、わかった。みんな、よく見ている。わしに逆らう奴はこうなるんだ」

リーダーが大きく息を吸い込むと、砂埃が回った。その砂埃が回転し、だんだんと渦が大きくなっていく。竜巻だ。吸い込まれる。健太は慌てて両手両足で目の前の木にしがみつく。

「あああああー」健太の家に来たむにゃにゃは木の枝や葉と一緒にリーダーの口の中に吸いこまれてしまった。

「ペッ」リーダーの口から枝や葉だけが吐き出された。むにゃむにゃは出てこない。食べられたのだ。

「ふん。口ほどにもない奴だ。それに全然夢がない。これじゃあ、腹の足しにもならないな。さあ、お前たち。働け、働け。子どもたちから夢を奪って来い。そうしないと、こいつのようになるぞ」リーダーは仲間を吸い込んだお腹をさする。

健太はリーダーや他のむにゃむにゃたちに見つからないように背をかがめ、急いで家に帰った。

翌日。健太は洋介と優子ちゃんに昨晚のことを話した。

「本当かよ。健太こそが夢見ているんじゃないか」

「そうよ。むにゃむにゃだなんて、寝言じゃない」

洋介と優子ちゃんはすぐには信じない。

「それじゃあ、僕の言うことが本当かどうかを確かめるために、今晚、中央公園に行こうよ」

洋介と優子ちゃんは眉をひそめながら、互いに顔を見合す。

「どうする？」 「どうしようか？」

「健太がこれだけ真剣なんだから本当なのかなあ？」 「じゃあ、行ってみる？」

三人は晩の十二時過ぎに中央公園の松の木に隠れていた。

「本当だ。公園の真ん中に塔が建っている」 「白い綿菓子のようなものがふわふわ浮いているわ」

「健太君の言うことは本当だったんだ」

「疑ってごめんね」

二人は健太の顔を見つめる。

「そんなことよりも、あの塔を早く壊さないといけない。僕たちの夢がどんどんと吸いこまれてしまうよ」

「でも、どうやって、あの塔を壊すんだい」

「たくさんのむにゃむにゃたちが塔の中を出入りしているわ。このまま塔に進めば、すぐに見つかってしまうわ」

「うーん、どうしよう」

三人は木陰の中で腕組をする。いい案は浮かばない。

「さあ、おまえたち。ひとつでも多く、子どもたちの夢を奪って来い。ふー」

リーダーが大きく息を吐くと他のむにゃむにゃたちは「ひゃあ」と叫びながら街に吹き飛ばされてしまった。

「さあ、あいつらがいなくなった間に、ひと休みだ」

リーダーは塔の真ん中に座ったまま、目をつぶって頭をブランコのように揺らし始めた。

「今だ」三人は猫がにゃんと鳴くように背をかがめ、足の裏に肉球があるかのように音を立てずに公園を横切ると、塔の中に滑り込んだ。